



自然の解説者 自然の解説者

秋季号 [第 69 号] 2020 年 10 月 12 日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙
事務局：〒371-0103 前橋市富士見町小暮
2425-28 櫻井昭寛方
電話・Fax 0274-42-2726
<http://inpuri.web.fc2.com/>
編集：総務企画部会

ぐんま森林インストラクター会の紹介

会長 塩田 政一

森林インストラクターは、平成3年に農林水産、環境省により登録事業として指定された制度で、「全国森林レクリエーション協会」（会長 三浦雄一郎氏）が認定する資格です。登山、トレッキング、自然観察、自然環境教育、森づくり等幅広い活動の指導者、いわゆる「森の案内人」として全国約3,200人が活躍しています。ぐんま森林インストラクター会は、群馬県内の有資格者及び、会の活動趣旨に賛同する人たちで、平成16年に設立されました。

活動は、森林公園を中心にして会員の親睦と資質向上を図るため、各自が有する体験、知識、技術情報を共有し、協力し合って活動しています。県民をはじめとした一般市民の方々に、森林や林業の重要度、維持管理の大切さ、難しさ、自然の素晴らしさを積極的にアピールし、それに対する理解度への増進に寄与すると共に持っている知識、体験、技術、情報を共有して、より活動を発展させています。

具体的活動は、群馬県内の森林公園を中心にして、自然観察会、森のめぐみ体験、森づくり体験など、本年は、14のテーマで行っています。

自然観察会は、尾瀬、玉原高原、谷川岳、榛名山、赤城山、小根山森林公園、草津を主なフィールドとして樹木・野草観察会、山菜教室、野鳥観察会、スノーシューでの冬芽観察会等を行っています。森のめぐみ体験は、ファミリー向けに植物観察と併せツリーイング（木登り）、ネイチャークラフト、丸太切り体験を実施し、他に森づくり体験として雑木林やスギ人工林の間伐、下草刈りをしています。また赤城自然塾会員としての活動、県森連イベント等への講師派遣、群馬県や市町村からの依頼による講師派遣等、幅広い活動をしています。



- ・会員募集随時、入会金なし、年会費3,000円
- ・ホームページ（ぐんま森林インストラクター会ブログ） <http://blog.goo.ne.jp/sinringu>



校庭の樹木⑭ ～枝葉が火炎状になるカイヅカイブキ～

顧問 亀井 健一

カイヅカイブキ（貝塚伊吹）は、学校や民家の生垣や境界木などとしてよく使われている常緑樹です。低木に仕立てることができ、細かい鱗状の葉が密生し、視界を完全に遮るなど重宝されています。また強い剪定にたえるので、動物などの形に刈り込むトピアリーに使われることもあります。とはいえ、剪定しないでおくと枝葉がねじれて火炎状に成長し、イメージとしてゴッホが描いた糸杉のようになります。そういえば、彼が好んで描いた糸杉は、ヒノキ科の常緑針葉高木で、槍の穂先のような樹形になるそうです。ゴッホは、名状し難い心の内を表現しようと、糸杉を燃え盛る炎のように描いたのかもしれませんが。

学校では手入れが行き届き、よく刈り込まれているために自然の樹形が想像できないかもしれません。なお、剪定が強いと写真のように、鱗状の葉に針状の葉が混じってくる場合があります。この現象は先祖であるビャクシンの特徴が現れたので、先祖返りと呼ばれています。このカイヅカイブキはヒノキ科ビャクシン属の常緑小高木で、ビャクシンの園芸品種と考えられています。樹高は通常6～7m（まれに10m）になりますが、低く刈り込まれていることが多いようです。葉は細かく鱗状になります。ビャクシンの葉は針状にとがりますが、突然変異で産まれた葉が鱗状になったものを、園芸品種カイヅカイブキとして選抜したのしょう。土質を選ばず痩せ地で育ち、乾燥にたえるので、庭木や生垣などに適しています。なお、もとなつたビャクシンは、本州（岩手県以南の太平洋側）、四国、九州、沖縄、朝鮮半島、中国に分布します。花期は4月、雌雄異株です。花も球果も小さいつぶつぶで、だれも気がつかないほどまったく目立ちません。



針状の葉と鱗状の葉

ビャクシンやカイヅカイブキは、ナシの木に感染する赤星病を媒介するので、梨畑の近くではこれらを植えることを禁止している地域もあります。

和名カイツカイブキのカイズカの名は、この木が大阪府貝塚市付近で作出されたからではないかとの説がありますが、証拠があるわけではなく、定かではないようです。なお、カイツカイブキは貝塚市の木に制定されていますが、この説に基づいているものと思われます。

<トピック> 観音山ファミリーパーク園内樹木調査

3月上旬、群馬県立観音山ファミリーパークより公園内に植栽され植生台帳に記載された樹木について、毎木の実態調査（樹高、幹周り、枝幅などの測定と記録）を行ってほしいとの依頼がありました。

新型コロナウイルスの影響で大幅に開始が遅れましたが、原則として月1度の観察会下見を兼ねた植生調査の日の午後、園内樹木調査として16時までの予定で行い、寒くなる前に終了させたいと考えています。数名が1組になり、できれば3組が平行して、測定・記録を実施すれば早期完了が可能かと思えます。協会員の皆様のご協力をお願いします。

<活動報告>

自然体験事業①「赤城山の自然を観察しよう。」 7月12日(日) 受託協力部会

参加者：一般7人（大人6名、子ども1名）協会員19名。亀井健一、櫻井昭寛講師による一般班は、覚満淵から鳥居峠、長七郎山、小沼を通過してビジターセンターのコースで自然観察をし、親子班は、須藤友治講師により覚満淵周辺の自然観察、スキー場での昆虫採集を行いました。

「普段何気なく見ていた植物や動物にさらに興味をもつことができた。」等の声がありました。（中村）

観音山ファミリーパーク自然観察会 総務企画部会

子供観察会「虫をさがそう・ネイチャーゲーム」 7月18日(土) 講師：茂木由美・杉原隆

参加者：一般18名、協会員11名。コロナウイルスのためイベントの中止が続き、久しぶりのイベントのせいか、例年より参加者が増えました。コロナ対策をして2班に分けて交代で実施しました。

「ゲーム楽しかった。」「変わった植物も見られた」などの感想がありました。（大畠）

「葉っぱであそぼう」8月22日(土) 講師：田中和夫、田村福次、参加者：一般9名、協会員11名
コロナ対策をして、葉っぱ合わせ、笹舟作り、オオバコ相撲などで遊び、森の中では、葉っぱを観察しました。夏休みなので親子の参加も多く、子どもから「植物が地球に生えるようになったのはいつごろからですか？」の質問にドキリ！朝山協会員がその場でネットで調べて答えました。（大畠）

「大木の役割」 9月19日(土) 講師：登坂璋典・清水岩夫、参加者：一般18名 協会員11名

「大きな栗の木の下」の唄を歌いスタート、3班に別れて森を観察しました。参加者は自然の森の成り立ちや植物の生き残りをかけての工夫や秘密を聞いて感心していました。（大畠）

前橋市委託事業①「森を歩いて生き物を見つけよう！クラフトも作ろう！」 7月19日(日)

おおさる山乃家 受託協力部会

参加者：一般12名（大人7名、子ども5名）協会員12名。午前は、浦野安孫、前村尚美講師によりおおさる山乃家周辺の動植物の観察を行いました。話が植物や動物と「人とかかわり」に触れ自然に対する興味関心が一層深まりました。午後は、大澤ひかる、五十嵐ルリ子講師の指導で、素敵なクラフト作品ができました。「山の空気をたくさん吸って自然に触れて楽しかった。」等の声がありました。（中村）

自然体験事業②「木工」 7月29日(日) 中止

前橋市自然体験活動委託事業②「川に入って生き物を調べよう！水鉄砲も作ろう！」 8月2日(日)

おおさる山乃家 受託協力部会

参加者：一般28名（大人13名、子ども15名）協会員13名。午前は、須藤友治、田中和夫講師の指導でおおさる川の水生動物を採集し、分類して川の環境について考えました。午後は、吉田卓一、五十嵐由記夫、大澤ひかる講師の指導で水鉄砲を作りました。（中村）

会員資質向上研修5「シカ食害対策アミ巻」 8月9日(日) 赤城山小沼湖畔 総務企画部会

協会員17名が参加して、小沼周辺の食害の多いリョウブヤツツジ類の幹にアミを巻きました。2班に分かれて、1班は新規にアミを巻き、もう1班は過去に巻いたアミを補修しながら、2時間程で250枚のアミを巻きました。終了後、7名が六本木さんの案内で長七郎山の登山を楽しみました。（櫻井）

わくわく子どもまつり「小鳥の巣箱作り」 8月22日(土) 中止

会員資質向上研修2 赤城山自然体験メニュー研修 8月30日(日) 赤城山覚満淵周辺 総務企画部会

中学校の自然体験学習の講師のための研修は、5月4日に予定していましたが、コロナ対策で16校の林間学校が中止となったため延期しました。改めて2学期に2校が実施するため、協会員33名が参加してベテラン講師の指導で5つの自然体験学習にチャレンジしました。（櫻井）

森林整備 インプリの森部会

7月18日(土) 8名参加、大林沼周遊路、倉庫南の森、道路際の刈払いを行いました。7月25日(土) 雨で中止。8月8日(土) 9名参加、神宮さんによるチェーンソーの安全講習と目立ての実施後、第二調整池周りの伐採樹木を選定し、1本伐採しました。8月22日(土) 11名参加、第二調整池周りの伐採予定樹木の一覧表（野帳）を作成し、4本伐採しました。9月12日(土) 雨のため中止。（酒井）



緑の窓

わたしと草木染め

第10期生 茂木 清美



私が草木染めと出会ったのは、20年前くらいだと思います。最初は絹を使った織物体験が始まりだったかもしれませんが、私が小学校に上がる頃に母親が内職で大きな機械で機織りの仕事をしていました。祖父は縦糸をはる職人だったそうです。物心着いた頃からガチャコン、ガチャコンという大きな音を毎日聞いて育ち、小学校の帰り道ではだいぶ遠くから響いていました。近所迷惑だったのではないかと今は思います。なので、テキスタイルとやらは身近にあったのもあり、すぐ夢中になりました。その延長で草木染めに入りました。身近にある色々な樹木や雑草としか思えないものなどから煮出した染液から人工の色では決して出せないなんとも言えない色の不思議さに惹かれました。染料植物園では何年にも渡り色々な体験をさせて頂きました。自分でデザインをおこし、型紙も作り、煮だした染液で絹を染める半年近いコースで学んだことは今でも貴重な体験です。そこで知り合った友達と一緒に習ったことを一通りやってみたり夢中で楽しみました。その当時作った型紙は宝物です。今では、年に数回インプリ仲間と楽しませて頂いています。自分のために染めるよりは、誰かにプレゼントするほうが楽しいですね。なにせ、今まで染めたストール等はコレクションであって、身に付けてお出かけしたことがないので、同じ染料であっても2度と同じ色にはならない草木染めは、いつでも始められる身近で楽しい趣味であることは間違いありません。機会があったらやってみてください。お勧めします！



豆知識

雑草の話 19 ヤブカラシ

理事長 関端 孝雄

6月下旬、土手下に畑を仕切る高さ1mほどの金網があり、向う側が見えない程つる植物が茂っていました。そこには、アオツツラフジ、ツルウメモドキ（つる性木本）、ノブドウ、ヤブカラシ、ヘクソカズラ、ヤブマメ、マルバアサガオ、それにカナムグラなどが競って重なり合っていました。正に熾烈な生存競争です。つる植物は、幹を太らせて自力で体を支えることをせず、そのエネルギーは細く長くつるを伸ばすことに使われ、他の物に頼っていち早くその上部に這い上がって葉を広げ、光を独占することです。

つるを伸ばし他の物に頼る方法に幾つかあります。1つは、上記のツルウメモドキ、ヘクソカズラ、ヤブマメなどは巻きつき型で、左か右に茎を他の物に巻きながら成長します。2番目に、カナムグラなどは引掛け型で刺や爪状のもので引掛けながら伸長します（観察中、カナムグラにサッと腕を捕られました。後刻痛さに気がついて見たら赤くミミズ腫れでした）。3つ目は、ヤブカラシやノブドウなどで茎の変化した巻きひげを出し、他の物にからみ付いて成長します。もう1つは、上記の植物にはないのですが、テイカカズラやツタなどで茎から気根や吸盤を出して他の物に付着する付着型です。こうした茎は引っ張りに強くないので、縦方向の繊維が多く、茎の太さの割に道管を太くしています。森の近くではマント群落の構成員にもなります。

ヤブカラシ（藪枯らし・ブドウ科ヤブカラシ属）は、多年草で日向を好み藪をも枯らすほどの勢いで茎を伸ばし、他の植物などをおおいながら抜きん出て光を獲得します

（図1）。1本のつるは途中から2分し、しっかりとコイルのように巻き付きます。時にそのらせん状態は途中から逆に巻いたりして引っ張りに強い構造も作ります。このような植物に家屋が覆われたら大分貧相に見えるかもしれませんが、それで**ビンボウカズラ**とも言われるのでしょう。体のあちらこちらに球形の美しく可愛い「真珠体」で飾ってはいるのですが、細くて長い地下茎は所々から芽生えてクローンを成し、根は利尿などの生薬として利用されるようですが、簡単には抜けず駆除には往生します。葉は、鋸歯辺のある5枚の小葉から成り、独特な形をした鳥足状複葉（図2）で互生です。芽吹いた頃の茎葉は赤紫色をしていて茎の先をだらりと下げています。その茎には稜があり（充分にあく抜きと水づけをすれば）食べられるそうです。花の付き方は葉と対生に集散花序を付けます。夏になると1つの花序にあるたくさんの蕾は順番に咲かず、可愛らしい花を三々五々咲かせます。萼は低くて目立たず、花弁は薄緑色で4枚、雄しべは4本、雌しべが1個です。しかし、昼過ぎに眺めてみると、ほとんどの花は花弁と雄しべを落としてしまします（何故、花弁までも？）。花の真ん中にロウソクを立てたような雌しべが橙色の大きな花盤から伸びています（図3）。花盤は多量の蜜を分泌して、虫たちはそれを背負わず受粉の駄賃に密を提供してもらいます。でも、この辺（関東以北）の株はヒガンバナと同様に三倍体なので結実しません。その分、体が大振りになりますが、何故か蜜を虫たちに大奉仕します。



図1. ヤブカラシ



図2. 葉



図3. 花

(右：完全な花、左：雌しべだけ)

巨樹・history⑦

地蔵峠の麓にある「シナノキの巨木」

第7期生 浦野 安孫

国道145号線は、羽根尾の「国道3起点の信号」で、国道144号と146号に分岐する。144号を進むと鳥居峠から上田市に出るが、途中、田代の信号から鹿沢温泉に向かうと地蔵峠を越え、長野県東御町に出る。この道は江戸時代、草津温泉に通じたので「湯道」とも呼ばれた。地蔵峠から湯道を4km程下ると、シナノキの巨木に出会える。古代、「長野はシナノキが多かったので信濃と呼ばれた」のだから長野にシナノキは珍しくはないが、これは樹齢約300年、幹周3.7m、林野庁の「森の巨人たち百選」にも選ばれた銘木である。この木の横に、見事な馬頭観音が安置されている。

シナノキと言えば、夏の軽井沢のホテルでの朝散歩ガイドを依頼される折、「まずは・・・」と、最初ホテルの庭のシナノキを扱う事にしている。都会からお見えのお客様が果序を投げ、「ヘリコプターみたい・・・！」と喜ぶ姿が微笑ましく、「スタートは、やはりこれだな・・・」と自己満足している。その後でシナノキの名の由来や花や実、樹皮から布やロープが取れる話、鎌原集落では被災後荒地に、繊維を取るためのシナノキも植栽した話等も紹介し、最後は「長野訪問を機に、シナノキは覚えて下さいね」とまとめる。

この街道を、鹿沢温泉から東御町新張(ミハリ)までの約11kmを車で走ると、面白い事に気付く。次々と観音様が出迎え、その数約100体。江戸から明治にかけての農閑期、長野側から地蔵峠を越え、群馬側に向かう湯治客や旅人は多かったと言う。冬は雪で道も消え、旅人の中には、途中凍死する者もいたらしい。そこで旅人や湯治客のために、1丁(約109m)毎に観音像を設置し、道標にしたのだと言う。これが、「地蔵峠の道標地蔵観音」或は「丁杭型観音」と呼ばれる、1番の東御町新張の信号の近くにある如意輪観音、100番の鹿沢温泉紅葉館前の千手観音、そして『50番の馬頭観音』等の観音様群である。地蔵峠には地蔵尊の隣に、80番十一面観音がある。



50番 馬頭観音

群馬に向かう旅人や湯治客は、新張と鹿沢の中間点にあるシナノキの木陰で休息し、近くを流れる湯尻川の水で喉を潤し、馬頭観音に旅の安全や湯治の効能を祈願し、再び歩みを進めたのだろう。

5月にシナノキの巨木を訪ねると、道路の向かい側にワラビが群生していた。二つかみ程頂き、馬頭観音に手を合わせ、新張へ向かった。

<協会の声>

鹿食害対策アミ巻きに参加して

第17期生 松島 理香

8月9日は、曇り時々小雨の涼しく活動しやすい気温でした。小沼をノコギリや剪定鋏を持ち、黒いアミを抱えたインプリ軍団(?)は、散策中の観光客に「ご苦労様です！」と声を掛けられながら、ズンズン進みます。私は掛けられる挨拶に、ちょっとドキドキしながら後ろをついて歩きました。

アミ巻き初体験の私はどれが食害に合いやすい樹木なのか、見てもわからない! 困った! どうしよう・・・。作業方法を教えていただき、初アミ巻き。見るとヤルでは大違い。真っ直ぐでアミの巻きやすい樹は無いんですね(笑)。皆さんのアミ巻を見て、五枚葉の樹がサラサドウダンなのかな?と。いつの間にか集団はばらけて、右の斜面、左の道端、湖のほとりで、ごそごそ枝が動く。でも人影は見えない。手持ちのインシュロックが無くなり、数枚のアミを残して12時に作業終了となりました。

アサギマダラに誘われて森に入ると、木肌が生々しく黄色になっている樹を発見。近づくサラサドウダンの幹の半分ほど皮が剥がされていました。幹の少し曲がった部分が赤くなり、まるで人が肘を怪我したように見えて、なんとも痛々しい。

鹿は生きるためだが、アミ巻は樹木を守るために続ける事が重要なんだと、この時に実感しました。

インプリ活動のお陰で、見る側から守る側になれた鹿食害対策アミ巻き。次回も参加させていただきたいです。



<協会が実施する事業・研修会等>

実施日	内容	会場
10月4日(日)	前橋市委託③「ネイチャーゲームと思い出のしおりを作ろう」	おおさる山乃家
10月10日(土)、24日(土)	森林整備	インプリの森
10月17日(土)	観音山ファミリーパーク自然観察会「タネの話」	県立観音山ファミリーパーク
10月18日(日)	自然体験事業④「秋の赤城山の自然を観察しよう！」	赤城山
10月31日(日)	会員資質向上研修⑧「吾妻渓谷とハッ場ダム」	吾妻渓谷
11月28日(土)	観音山ファミリーパーク自然観察会「紅葉について」	県立観音山ファミリーパーク
12月5日(土)	竹炭焼き	富士見町インプリ広場

<編集後記> いまだコロナウイルス禍中ですが、対策を十分に取ってインタープリターの活動を開始しました。一般からも会員からもたくさんの応募があり、ネイチャーインタープリターの意義を再確認しました。(櫻井陽子)